

## 小規模校における音楽授業の方法

畠澤 郎

### Music Teaching Methods for Small Schools

HATAZAWA Tsukasa

#### 1 はじめに

学校における音楽科教育は、「表現」及び「鑑賞」の2領域の学習指導を通して、子どもの音楽的な能力の伸長や感性を高めるとともに、人格形成の上で特に心情面の陶冶を図り、生涯にわたって音楽に親しむことができる人間育成をめざして展開される。しかし、これまで“学校の音楽授業は嫌いだ”という子どもが増えていることが度々報告されてきた。

このことは大規模校よりも小規模校、また、小学校よりも中学校の方が大きいようであるが、少子化とともに人口の一極集中現象が進み、地方では学校規模が年々小さくなる傾向にある。鹿児島県は北海道に次いで全国2番目に小規模校が多く、平成2年では191だった複式学級数（文部省調べ）が、平成19年度には538に増えている。

小規模校といっても、都市部の学校とへき地の学校では自然や社会環境が違うこと、また、学校に対する保護者の期待や願いも異なることから同一視できないが、音楽に限らず各教科の指導について大規模校とは違う特有の問題を抱えている。

ここでは、小規模校の複式学級における小学校音楽授業の実態をとらえるとともに、その指導のあり方について考えたい。

#### 2 音楽指導における問題

一般に、小学校における二個学年の複式学級では、学年毎の児童数がほぼ同数で15～20名程度の人数が指導しやすいといわれている。すなわち、子ども一人ひとりの個性や能力をとらえてきめ細かい指導ができる人数ということであり、また、子ども同士の結びつきを活かしながら相互で教えあう場面もつくりやすいとされる。しかし、音楽学習の場合、合唱や合奏の活動で音の重なりやその厚みを楽しむためにはこの人数が適切だとはいえない。実際の授業づくりに関する問題として指導に携わる教師たちからは次ぎのような声が聞かれた。

##### ① 児童に関わること

- ・小声でしゃべっていても周りに伝わる生活の中、家庭や学校で大声を出す習慣がないことから、合唱ではお互いの声が聴こえ過ぎて照れから堂々と声を出したがない。

・大きな声やハリのある声の出し方をどのように指導したらよいか。

## ② 教師に関わること

・ピアノの技能に乏しいことから伴奏が難しい。・発声の仕方やリコーダー等の楽器の指導ができない。

## ③ 教材・教具に関わること

・子どもの学習にふさわしい教材がない。・楽器が老朽化している。

これらは教師の力量の問題であるといえよう。音楽学習では、仲間たちと合唱や合奏の活動を通して豊かな響き合いを味わえるが、技術を伴うことから、少人数の学習では個人の演奏のつまずきが目立ってしまう。このことが技能に自信のない子どもにとっては積極的に学習に参加できない気分させる。また、このような状態が中学校の学習にも続いてしまい、音楽授業離れを引き起こすことになる。

①に関しては、生活上の話声と歌唱での発声との違いについて伝えたり、範唱 CD 等を活用したりしながら、声の出し方を工夫させる。そして、少しでも良い発声の子どもが見られたら大いに励まして自信を持たせるようにしたい。上学年の子どもに下学年生指導のためのアシスタントとして取り組ませることも考えられよう。

②に関しては、小学校の場合、指導者のピアノ等の演奏技能の得手不得手が授業展開に大きく関わってくる。大規模校では担任が不得意であっても音楽専科がいたり、得意な先生と交換授業をしたりすることができる。また、数多い子どもの中には、ピアノ等の得意な者もいるであろう。一方、小規模校では教師の数が少ないことや短期的な人事異動によって固定した教師に授業を担当してもらうことが不可能である。

しかし、ピアノ演奏が不得意であっても、最近では歌唱や器楽教材のカラオケ CD の開発や指導者用オルガンの改良が進み、それらの演奏に合わせて子どもたちは楽しみながら学習活動に取り組むことができるような教具やソフトが用意されている。実際のピアノやオルガンによる場合、伴奏譜通りに弾く必要はない。教科書で取り上げられる主教材のほとんどは、I・IV・Vの主要三和音によって伴奏できる。旋律と和音の関係を見つけることによって簡単に伴奏を工夫することができる。要は子どもたちが気持ちを込めて堂々と歌えるようにさせることである。

また、小学校音楽における個人持ちの楽器は、鍵盤ハーモニカとソプラノリコーダーである。これらの指導については、タンギング、レガート奏と息の使い方のコツをとらえさせるだけで、子どもたちは自主的に取り組みながらメキメキ上達する。リコーダーの導入段階で気をつけたいことは、左手が上で右手が下だということをしっかり意識させることである。

③の教材に関しては、複式学級の場合、少人数によるアンサンブルということになる。教科書の小編成アンサンブル教材の他に、歌唱教材や歌集から選曲して編曲する方法もある。

子どもが取り組みやすそうな旋律を2部程度に編曲したものを用意し、それぞれ好きな曲を選ばせながら、パート間の音の響き合う楽しさを味わわせたい。

また、教具の老朽化に関しては、管理者としての学校長との交渉ということになるだろう、子どもたちが合奏等の学習に意欲を持って取り組む様子を見てもらうなどして、必要な楽器を整備する工夫をしたい。

重要なことはこれらの工夫や指導に取り組む教師の姿勢であろう。もともと音楽そのものが嫌いな子どもはいないはずである。子どもたちが授業の音楽を嫌う最も大きな原因は、教師の苦手意識による自信のない雰囲気で開催される授業だと考える。そのような授業が繰り返されるならば、子どもが音楽授業から離れていくのは当然のことである。

### 3 複式における授業設計

#### (1) 年間指導計画について

複式学級における授業の難しさは、同時に異なる学年の子どもたちに学習させなければならないことである。そのための年間指導計画立案の考え方としては、「A・B年度二本案」、「A・B・C年度三本案」、「集合学習取り入れ案」等、学校規模や指導者の考え方によってさまざまである。

音楽の場合、学習指導要領の学年目標が低学年・中学年・高学年の2学年ごとにまとめられていることから、「A・B二本案」が多く採用されている。この年間指導計画は、二個学年の学習内容を、A年度とB年度の二年間に平均に配分し、いずれの年度においても両学年に対して同時に同じ内容を同じ程度に指導する計画である。すなわち、音楽授業は「音」を伴う学習活動であるために、それぞれの学年の児童に対して同時に異なる教材で指導することが不可能である。そこで二個学年分の学習内容を学年の順序によらず、二年間で指導しようとする考えによる。この計画による授業では、複式学級であっても学習内容やその展開は単式的なものとなり、学年別の直接指導・間接指導のわずらわしさがなくなる。その立案にあたっては次のことに留意したい。

##### ① 音楽科の目標と内容の理解

学校の教育目標や学習指導要領に示されている音楽科の目標とともに、該当する両学年における学習内容を踏まえておく。目標・内容の設定に際しては、実際に指導する子どもたちの能力の実態も加味するようにする。

##### ② 年間指導計画作成に関する内容

音楽科の題材（単元の語は使わない）には、「楽曲」によるものと「主題」によるものと二つの形がある。

・「楽曲による題材」とは、一つの楽曲（教材）を中心に様々な活動を展開する中で、音楽的諸能力を伸ばしていこうとするもの。

・「主題による題材」とは、意図する音楽的な内容を理解、感得させるために、主たる教材や副教材を用いて指導目標の達成に向けて学習展開しようとするもの。

### ③ 題材、教材の配列

この配列に関しては、学習内容の量や難易の程度を分析するとともに、両年次に平均にすることが大切である。また、表現・鑑賞の2領域間のバランスのとれた配列についても考慮する必要があるだろう。

## (2) 教材の選択・開発

教材は、子どもが学習において最も具体的な活動として関わるものであるから、意欲を持って取り組めるような魅力的な楽曲を選びたいものである。日々多忙なために教材研究の時間を生み出すことは難しいと思われるが、教科書教材を順に与えるのではなく、教科書以外の曲集等を検討して指導する児童の実態に最もふさわしい教材を開発したい。

複式の音楽授業では、一般的に同内容・同程度のもので取り上げられるが、同じ内容であっても学年によって程度が異なる与えかたが理想的である。例えば、3・4年生のリコーダーアンサンブル学習の場合、3年生の主旋律に対して4年生にはオブリガート等の少し難しい副旋律のパートを分担させることが考えられる。

教材は、子どもの能力よりも少し難しいものを用意し、頑張れば出来る、挑戦してみよう、などと励ましながら個々に努力目標をたてさせるようにする。そして、仕上げた時の達成感や満足感を味わわせたい。

## (3) 学習形態の工夫

音楽の授業展開が常に同じパターンの繰り返しであったら、子どもたちは活動に飽きてしまうことになる。1時間の授業の中で、一斉指導や個別指導、グループ活動、ペア学習等、いくつかの形態を組み合わせることで学習活動に変化をもたせることによって、子どもは新鮮な気分で学習活動に取り組める。例えば、学年毎や異学年のグループ学習、また、下学年に対して上学年の子どもに交替しながら指導させることも考えられる。このような活動は、上学年の子どもに学習意欲を喚起させるとともに自信を持たせることにもつながる。当然のことながら、この場面では教師のフォローが必要となる。

小規模校における教育は、少人数の子どもが対象であることから、個々の個性や能力の実態をふまえた指導がしやすい。情報や物質等の面では都市部の大規模校に劣るが、学校をとりまく人々の協力が得やすい環境にあり、音楽指導に関しても地域の人材を活用することは子どもの成長にとって大変有意義なことである。しかし、直接指導にあたる教師の教育に対する取り組み姿勢こそが、子どもの成長に最も大きな影響を及ぼすのである。つまり、学校は知識や技能を教えるだけでなく、「学び方を学ばせる」場でもあるのである。